白門48会10周年記念誌発刊にあたって

白門48会会長

赤 羽 進 一 郎

白門48会が創立されてから早いもので10年が経過いたしました。創立にいたる準備段階から創立10周年を迎えた今日まで、白門48会の成長・発展を支えていただいた会員のみなさまのご尽力に、この場をかりて感謝申し上げたいと思います。

今回10周年記念行事のひとつとしてこの記念誌を発行することになりました。

“わが青春”、“わが母校”、“わが人生”など自由なテーマなら、当会の行事に参加できない方にも参加いただけるのではないかということで、記念誌への原稿執筆をお願い致しました。たくさんの原稿、なつかしい写真が多数掲載されることを期待しています。

私は、昨年6月に堀井前会長からバトンを引き継ぎました。会長就任挨拶の中でも団塊の世代に位置付けられる我々も、まもなく還暦を迎え現役あるいは社会の第一線から退いていく訳ですが、その時残りの人生の生き方、心の支えになるであろうと考えられる場所の一つが当会ではないかと申し上げました。いみじくも今総会で創立10周年記念講演をお願いした、浜田和幸氏の著書「団塊世代のアンチエイジング」に、今すぐできるアンチエイジング実践法のアドバイスの一つとして、“決して現役からリタイアしないこと”とあります。すなわち、退職後もいかにして現役時代の活発な人間関係や時間の過ごし方を新たに発掘できるかどうかが、その人の健康を大きく左右する。その意味では仕事に匹敵する社会との関わり方を現役時代から徐々に開拓しておく必要がある、とありました。つまり白門48会こそがそのために用意された、社会の一つだと強く確信するにいたりました。

そうした意味でも、今後未加入の方も含め多数の会員のみなさんが、当会の設立趣旨とこれまでの活動実績をもう一度ご理解ご認識いただき、当会に引き続き積極的に参加していただけますようお願い致します。

総　会

第1回総会　1999年（平成11）6月5日

第2回総会　2000年（平成12）6月10日

第4回総会　2002年（平成14）6月8日

第5回総会　2003年（平成15）6月14日

第7回総会　2005年（平成17）6月12日

第8回総会　2006年（平成18）6月10日

思い出グラフティ　48会

10年間の活動から

第3回総会

2001年(平成13)6月9日

植樹祭

1999年(平成11)11月13日

ホームカミングデー

2004年(平成16)10月24日

第6回総会

2004年(平成16)6月12日

第9回総会

2007年(平成19)6月23日

俳句の会

2001年(平成13)4月21日

同好会

応援

箱根駅伝

6区野村俊輔選手

5区藤原正和選手

ハイキング

2002年(平成14)11月16日

特別寄稿

安村ゼミ

赤羽進一郎
商学部商業貿易学科卒
千葉市在住

思い起こせば安田講堂に象徴される大學紛争の真っ只中の昭和44年に入学。入試は学内で実施できずに付属高校や水道橋の通信教育校舎などで分散して実施。入学式もなし。しかも入学後しばらくはロックアウトにより授業がないどころか校内にも入れず。期末試験はレポート提出で救われ無事卒業。なんとなく4年間の大学生活があっという間に過ぎ去ってしまった気がします。

しかし、ロックアウトがあったからこそクラスの仲間と親しくなることが出来、また1～2年生時には全員がゼミへの参加を義務づけられる制度となり、大学の教授に接する機会が早くから得られました。特に3～4年生の2年間の安村ゼミは、3年次はテーマ毎にグループ討論でそれなりに理論武装してゼミ会で発表するも、安村先生に厳しく問題点を追及され再チャレンジの繰り返しと、比較的まじめに勉強したのではと思っています。4年次は社会に出る準備として必修科目であったマージャンに熱中、教室で待ち合わせて雀荘へという日々でした。

この時のゼミ仲間との付き合いは、社会に出て35年経過してそれぞれ異なった人生を過ごしていますが、再会するといつも昔の思い出話に終始し、ホッとした楽しいひと時を過ごすことができます。今後も大事にしたい仲間です。

この写真は卒業直前のある日、故安村重正教授と共にゼミ仲間全員と旧正門付近で撮った卒業記念写真です。全員真摯で希望に満ち溢れた、一遍の不安も感じていないような顔をして写っています。本当に若かったんだなあとあらためて思います。当時の就職事情は売り手市場で早い人では3年生の12月に決まった人もおり、ゼミ仲間のほとんどが4年生になる前に就職が決まっていました。したがって、この余裕からか世の中が自分を中心に回っているような気にもなっていました。いまにしてみれば、それは大きな錯誤だったのですが、でも、もう一度戻れるなら戻りたい4年間です。

35年前安村ゼミの仲間達と(旧正門付近)

大学時代の思い出

遠藤利明
法学部卒
山形市在住

昭和44年、入学したものの学園紛争の真っ只中で入学式は9月だったと思います。入学式から僅か経った頃、新しく知り合ったクラスメートから誘われ、司法試験を目指す研究会の入室試験に同行。まだ全く習っていない法学の問題が出たのでビックリ。もともと法律家ではなく政治家志望だったので、即退出。

司法試験希望者は入学時からすでに法律の勉強をしているとのこと。後で聞いてまたビックリしました。

一年次で採ったラグビーの授業で桑原寛樹先生を知り、ラグビーの面白さはもちろん先生の魅力に引かれ、先生の主催する『くるみラグビークラブ』に入会、4年間ただひたすらにクラブ活動に専念しました。

先生の行動力と、それまでの体育会系運動部の考え方を否定し、今のヨーロッパ的クラブ運営を基本とした先生の考え方に心酔。3年生からは東久留米にあるクラブの寮に入り、当時200数十名を数えたクラブの運営に専念、毎日が試合や練習、そして先生の体育の授業で助手を務め、学校にはほとんど行きませんでした。

4年次には、クラブ員だけで資金集めや現場での作業に取り組み、自分たち手作りの『くるみクラブ蔵王グランド・ハウス』を完成。大きな達成感を味わいました。

今、国会議員として判断に悩む時、当時のクラブ活動時にどう判断したのかを今に置き換え、大変参考にしています。

「わが青春」

～放浪のはての仲間との再会～

黒　羽　一　記

文学部卒
京都市在住

「わが青春は?」とかまえて言うほどの劇的な青春時代をおくったわけでもありませんが、今、半世紀以上生きて振り返ると、青春時代は、やはりお茶の水の四年間にあったのかなと思います。学生運動の真っ只中に入学したわれわれ「白門48会」の面々ですが、この異常事態にどう対処すべきなのか、誰しもが迷ったのではないでしょうか。私もやはりこの学生運動に大なり小なりに巻き込まれてしまいました。そして、挫折もし、酒も飲み、マージャンもし、恋愛もし、失恋もし、将来への不安、がすべてこの時代に集中した時代でした。ただ、唯一悔やまれるのが、勉強に精を出さなかったことですが・・・。

卒業直前まで全く就職活動はせず、卒業と同時に、カメラを抱えて放浪の旅に出てしまった私です。どこへ行くという旅ではなしに、行き当たりばったりの旅、お金がなくなるとその土地でアルバイトをして、食いつないでいました。大阪の釜ヶ埼で日雇いの仕事、温泉地の旅館の雑用係などで日銭を稼ぎながらの旅でした。そんな放浪の旅を数ヶ月たったころ、ある夜、ひとり布団にくるまっていると、ふと「自分は一体何をやっているんだろう?」と、そして「このままでは駄目になる」と思い、翌日急きょ東京に引き返しました。

東京に戻り、先輩のつてをたよりに、ある映画製作会社に入り、ようやくまともな社会生活に復帰した訳であります。その後、広告代理店や博覧会などのイベントの仕事やらをしながら、今に至っているわけですが、そんな時、「白門48会」を立ち上げるという話が伝わってきました。最初はあまり乗り気ではなかったのですが、たまたま仕事仲間に中央大学の先輩がおり、「そういう会や仲間は大事にしろ、決して損はしない」とアドバイスをされ、最初の立ち上げの会に参加。

その会も、早や10年もたつ、京都在住ですので、なかなか会の運営には協力出来ず、なるべく東京の会合には参加する、と行ったことしか出来ません。同時代に遊び、悩み、遊んだ仲間たちがいる「白門48会」での出会いは、あの頃を振りかえるとともに、これからの生き方をもう一度考えるいい機会であると思います。今後ともさらに、この「白門48会」の発展と参加する皆様の健康を願うばかりであります。

御茶ノ水の思い出

小　林　　裕
文学部卒
東京都江戸川区在住

あの東京大学安田講堂事件の昭和44年が、私の大学受験の年だった。日本の各地の大学で紛争が起こり、明治以来、初めて東大入試が中止となった。今も御茶ノ水の明大の脇にある、「三楽病院」で生まれ、中学三年まで一ツ橋中学に通っていたため、御茶ノ水から水道橋周辺にはなじみがある。でも御茶ノ水のニコライ堂の脇は、よく通っていたが、中大があるのは、まったく知らなかった。また第一志望が国公立大であったため、私立大学自体の受験を考えていなかった。まだ、1期校、2期校の区別があった頃のことなので、どこかには受かる大学があるだろうと高を括ってもいた。

ところが、新聞の報道に国立大学の解体論が載ったり、紛争の拡大で、滑り止めをというので、急遽、御茶ノ水近辺の大学で、授業料の安い大学を調べたところ中央が授業料、「年6万1千5百円」で、一番安かったため、文学部文学科の英米文学専攻というのを受験して見た。ちなみに、当時の国立大学の授業料は、「3万5千円」(文系)だった。受験は、当時、水道橋に在った通信教育学部の校舎だった。石炭燃料のダルマストーブのまん前で、すごく熱くて、のぼせそうになった。問題は標準的なもので私にも良く解け、時間が余った。また、英国社で受験したのだが、苦手な古文も山が当たり、すべて解答できたし、漢文は得意科目のため問題なく、社会は世界史のサブノートで前日おさらいしたところが出題されており、英語も問題集で良く見かけるような標準的な問題だった。ある日の午前中寝ていると、ポストに何か入った音がしたので、行って見ると玄関に封筒が入っていた。その厚みで合格が分かった。国立には破れ、結果的に、中大に進学することになった。

しかし、授業は、なかなか始まらず、やむなく、一日中、ニコライ堂の先にあった大学の図書館に籠もり、高校時代に読み残した日本の作家の小説を読みまくったものだった。金がなかったので、高校時代の制服を2カ月ほど着ていたため応援団と間違われたこともあった。夏休み中に、多摩の校地のプレハブ教室で、授業が再開され午前中機動隊に守られて授業を受け、午後はテストだった。私は教職課程を取っていたため、さらに、6時から水道橋の通信教育学部で9時まで授業を受け、すぐにテストを受けた。家に着くともう12時だった。1年の時は本当に良く勉強していた。9月からは、御茶ノ水の校舎で授業が始まったが、夜は、神田外語学院で英会話の学習をした。2年生の頃、あの三島由紀夫が、市ヶ谷の自衛隊の施設で割腹自殺し、世情は殺伐としていた。3年の頃は、日がな一日、文学部の食堂で学習していた。4年になってそろそろ就職を考えようかと思ったが、聞くと友人たちのほとんどがすでに、会社訪問を終え、中には内定をもらった者もいるとのことで、そろそろ何かしなくてはと、5月の連休あけに探してみるとまだ間に合うのは教員採用試験だけだった。両親が教員のためこれだけは、付きたくない職業だと思っていたのだがこの試験しか間に合うものがなかったので受験して見た。母が小学校、父が中学の教員だったので、私は、高校の教員をめざすことにし、千葉県に採用され、今日に至っている。まるで、アービングの『リップ・バン・ウィンクル』のように、ふと、気付ともう35年の歳月が流れている。今年の4月に、現役教員として最後の転勤をし、残された後3年でライフワークの国際教育の研究のまとめをしようかと考えている。

蓮池　薫氏と私の学生時代

齋　藤　恒　夫
法学部卒
埼玉県所沢市在住

平成20年3月　蓮池　薫氏が　中央大学法学部を無事卒業されました。

このように書きますと、何の変哲もないありきたりな文句だなーとの感想をもたれる方が、多いのではないでしょうか・・。

その謎は、彼は、24年前に中央大学3年在学中に北朝鮮に「拉致」されて、帰国後、復学を果たされ、無事卒業単位を取得されて、このたび晴れて卒業生になったわけです。

私自身も、お茶の水校舎に、法学部(通教生)として在学をしていた身でありました。

あの頃、「拉致」なる言葉は、アジ演説をしていた一部の学生が、使用していたように記憶しています。

栃木県から東京に出てきて間もない私にとって、「拉致」なる言葉は「言語明瞭意味不明」でありました。

この問題が、近年社会的な問題として取り上げられるようになっているとは夢にも思いませんでした。また、「拉致」とは、国家的犯罪であることを、最近理解致しました。

未だにこの問題は、問題解決の糸口さえも見いだせないでいます。

蓮池さんの卒業にあたり、30年前を思いだされる私でした。

(平成20年4月8日記)

わが青春

(学生時代の思い出)

市　野　沢　京　子
法学部政治学科卒
東京都新宿区在住

私が入学した当時は、七十年代の階級闘争、安保問題のある頃でした。学内はバリケード封鎖されていた頃で、入学式が例年より遅れてありました。私は、法学部、政治学科、28組で、生徒数は七十人をこえていたでしょうか、その中で女生徒は、たったの四人で、目立つ存在でした。一年の頃から司法試験を目先しての数人の集りのグループに入り勉強会をしていましたが、私と私の友人(女性)が何かいつも同じメンバーだけでなく、もっと広く視野を持ちたいという意味で、そのグループからはずれました。そして、私はその後、少々司法試験の勉強をなまけました。英語と仏語は自分でもうなずく程よく予習をしたものでしたが。ところが、又、男性を意識する年頃のため化粧をし始めました。グループで、駿が台から千鳥が淵まで歩いていってはボートに乗ったり、新宿御苑に行っては男子学生と木登りしたり、心は全く童心に戻っていったのでした。夏には新宿西口まで行って有名なソフトクリーム屋さんに何人もの行列の中に混り、並んで買って食べたりし、又、皆よく歩き、武道館までも歩き、男子学生は庭の隅ですもうを取ったりしていました。

しかし、行動では遊んだり、はしゃいだりしていた時期ですが、精神的には悩み一杯の時期でした。階級闘争、安保の問題が、私の頭にふりかかっていたのです。当時は、お嬢様育ちだった私は、自分の置かれている立場を考えざるにはいかなかったのでした。先程の女生徒と話し合いをし、「反戦平和のデモ」だけには(国で許されていた)参加したのです。皆、「反戦平和」と言いながら仏式デモをしました。ところが途中、ひどいことが起りました。私達の方向に目がけて、後部のデモ隊から火炎ビンを投げられたのです。私達は、男子学生にかばわれて、幸いにけがはなかったのですが。

夏休みになると我が家は家族旅行をし全国各地を回って自然とたわむれてきました。3年になると一人でツアーに入り、ヨーロッパ旅行を四、五回し、多少なりとも見聞を広めてきました。又、四年になると、司法試験の勉強をし始め、卒業後の結婚生活で、司法試験を受けました。その後、事情があり、離婚し、そしてその後家に弁護士バッジが届き、今はもう亡き父親と、弁護士事務所と霞が関の間をよく行ったりきたりしたものです。今は、華道教授と、エッセイイスト、ポエムニストをしておりますが。

大学時代を振り返って

田口重雄
理工学部数学科卒
千葉県柏市在住

仕事の上で是非とも必要な資格を取るために卒業証明書が必要となり、平成15年3月に母校・理工学部を30年ぶりに訪問した。卒業当時は一号館、二号館、実験棟の3棟があるのみであったが、昔のバスケットコートや相撲部があったところに高層棟が建っており、また通用門を入ったところに高校が併設されており、時の流れを感じるとともに、母校の発展を肌で感じた。

在学当時のことを振り返ってみる。入学した昭和44年は学生運動（大学紛争）が盛んな時代であり、確か授業が始まったのは8月だったと記憶している。授業中に中庭でデモ行進が行われることもあり、日常と非日常が奇妙に混ざり合っていた。

地下鉄後楽園駅を利用していたが、駅の改札を出ると、競輪の予想紙を売るおばさん達が群がって来た。富坂を登り、通用門を入ると左側に掲示板があり、まず休講の掲示があるかを確認した。休講が非常に多い先生もいた。

授業は理工学部校舎の他に、水道橋駅を降り飯田橋寄りにあった後楽園校舎（木造の古い趣のある校舎）でも行われた。大学1年の一般教養科目（経済学、法学、哲学）はその後楽園校舎で受講した。

数学科だったので、コンピュータの演習があった。当時のテクノロジーと今のテクノロジーを比較するのは酷であるが、基礎理論を学ぶことには大いに役立った。今では関数電卓があるために、プログラムの結果の検証を容易にできると思うが、当時は岩波の高等関数表やタイガー計算機、計算尺を使っていた。懐かしい思い出である。

卒業後は「いつでもどこでも誰とでも、見たり聞いたり話したり」という今で言うユビキタスを標榜する会社に就職した。平成18年に56歳で関係会社に移籍となり、あと2年で定年という時期に来ている。健康に留意してもうひと頑張りしていきたい。

我が中央大学と体育会運動部

橋本博
経済学部卒
宮崎市在住

昭和39年東京オリンピック開催、43年メキシコオリンピックが開催された時代に当時は驚くこともなく我が白門運動部卒業生、現役大学生が実に多くの日本代表選手として世界選手を相手に戦っていたことを忘れたくない。当然、「参加することに意義がある」など悠長なことを言って羽田空港を旅立つ白門選手など誰一人としていない。先輩諸氏は目指すは「金」有言実行であり、また、その言葉どうりに世界の強豪を相手に見事「金メダル」を手中にして凱旋帰国をしていた強豪中央大学運動部である。

そんな中央大学水泳部にあこがれていた私は中学、高校と水泳部に属しておりインターハイ2度の優勝経験チームの九州の田舎高校生として、次回1972年に開催されるドイツ、ミュンヘンオリンピック日本代表としての出場を虎視眈々と狙っていた。

日本代表になりさらに、アジアで唯一の代表権獲得を必要条件とされる水球競技は過酷な上に、選手の年齢層が非常に高く当時でも大学生の日本代表選手は希であった。

進路選択の際に大学選手権で上位に食い込むが、なかなか優勝のチャンスが巡ってこない中大を進路先に選択した理由に、自由な校風、先輩のバンからスタイルに憧れて迷うことなく前年度大学選手権五位のチームの一員と成ることを決意した。

忘れもしない二月の大学入試は、お茶の水の本校を見ることもなく、経験し

たこともない冷たい冬の雨が降る水道橋校舎で受験し、結果を待つまでの辛さを九州と違う東京の寒さと共に体験した。学園紛争は他岸の火事とのんびりと対応していた私に大学本校も見ることができない、入試結果はどこに送られて来るのか、本当に入学できるのか、大学スポーツは継続されるのか等々、高校生には過重な不安材料を一気に体験させてくれた昭和44年2月東京の冬であった。

何とか入学許可が届き、春、四月の入学式には学生服と大学帽を揃えてくれた両親と記念撮影を期待していた矢先に—「ロックアウト」—入学式もなく、目新しい言葉に自分の人生の選択が本当にこれで良かったのか、と自問自答を繰り返し続けた数ヶ月であった。44年春には桜満開と大雪に見舞われ、合宿所生活とプールでの練習、毎日の生活に何かが足りない。そう、大学生としての学ぶ場のないことに本当にこれでよいのか、人生70年と言われた時代、多くのことを経験したい青春時代に学ぶ機会も失われて、大学での友人を作るチャンスもなく随分暗いやるせない気持ちになっていた。

ようやくお茶の水本校に入ることができたのは秋になった頃であり、四月に履修した科目がなんであったかも忘れる程、自分の心の中では時が過ぎていた。

昭和44年4月に入学した同級生の運動部員は全国的に見ても決してトップレベルの選手がいたわけではなかった。先輩には金メダリストや卒業後、プロ野球で大活躍する選手となる素晴らしい素質の持ち主の大選手が校舎内をかっ歩する姿に当時より憧れて見ていた。

そんな、44年入学生ではあったが4年後の昭和47年夏、ミュンヘンオリンピックに実に5名もの現役中央大学生が出場することになった。陸上部稲岡さん（走り高跳び女子）、レスリング部の鎌田君、鶴田君（後のジャンボ鶴田）、ハンドボール部佐々木君、水球部橋本の現役大学生がミュンヘンに旅たった。もちろん、多くの白門卒業生が日本代表選手としてミュンヘンで大活躍をしていたことはみなさんの記憶に鮮明に残っていることでしょう。また、先輩が出場したバレーボール競技の金メダル獲得の瞬間に、授業を一諸に受けていた人があの感動劇の主役でおられることに人生の出会いのすばらしさを感じた。

さらに同級生は、ミュンヘンオリンピック後開催されたモントリオールオリンピックへ佐々木君、花輪君（ハンドボール）、バスケットボール結城君が出場している。

何が幸いしたか47年の大学スポーツ界は中央大学勢が大活躍の年でもあった。バスケットボール部のリーグ戦優勝、レスリング部の優勝、また、野球部の東都リーグ優勝もあり、個人的にも数々の中央大学関係者の優勝が新聞紙上をにぎやかにさせていた。後輩にはプロ野球で活躍する選手、各競技で日本代表をする選手が多く育ったことは先輩として少し自慢する後輩の育て方でしたか。

私の所属する水泳部水球部門は先輩や後輩に恵まれて、在学4年間で3回の大学大会制覇を経験することができた。自由な校風、バンからスタイルは自分自身の生活信条に合っていたようで、大学生活に苦痛を感じることは一度もなく、楽しく過ごすことのできた四年間であった。

現在、高校教師として母校中央大学に多くの新入生を送り、自分が体験した中央大学生活の語ることのできない良さを体験させている。それが自分を育ててくれた母校への恩返しだと信じている。また、嬉しいことに、我が娘までが中央大学で学び卒業し後輩となったことである。娘曰く、「お父さんが学ぶこととのできなかった数ヶ月間を私が取り戻します。」が、入学時の言葉であった。

残念ながら言われるとおりで、2回のレポート試験と数回のロックアウトにより48会メンバーは通常四年生より通学期間が少し短かった。その短い期間はこれから高齢者となるみんなの団結力で母校の発展への献身的な支援で履修修得としていただきます。

（元体育会水泳部水球主将）

単純な生活

半田　直
文学部国史学科卒
神奈川県鎌倉市在住

学生時代をふりかえると、旧校舎の四角い中庭の光景が真っ先に浮かんでくる。教室脇の通路から見下ろすと、ヘルメットを被った活動家たちがスクラムを組み、黒ヘルの隊列から長い棍棒を突き出しては、何かを叫んでいる。授業を終え通路に溢れた学生たちも、眼下の活動家たちも、一様に押し黙った顔をして、私の横を通りすぎていったような気がする。

私は、その雑踏の中に、何を探してたのだろうか。好意を寄せていた女子学生の姿だったのか。それとも、自身の将来の姿だったのだろうか。

卒業後、私は出版社に勤め、主に歴史書専門の編集者になった。専攻が日本史だったので、志望通りだったのかもしれない。二十代は仕事が楽しくて仕方がなかった。三年がかりで取材した写真集が、土門拳賞を受賞したことで、編集者としての達成感があり、出版社を辞め、渡仏した。三十二歳の時である。フランスミステリーの勉強が目的だった。帰国後は、「ミステリマガジン」などにエッセイを書いたりして過ごした。

その後、出版社に再就職した。二十年が、あっという間に過ぎ去った。その最後の数年間は人並みに介護も経験した。否、私のしたことは、世間で言われているような辛い「介護」とはほど遠いものだったと思う。

むしろ、彼岸に去っていった身内に大切なことを教えられたことに感謝している。それは道元禅師の『正法眼蔵』のなかにある「愛語」という行為が本当にあるのだということを、身をもって示されたからである。

昨年、出版社を早期退職した。最後の肩書きが取締役編集部長だった。ある日、仕事は、これでおしまい、と思った瞬間、私は、この役職を任期途中で辞した。

私は、四月から、美術学校に入学する。そこで、中国水墨画を一から勉強することになっている。野放図で、単純な信条のみで生きていた少年時代、私は絵が好きだった。後半生は、その絵を描いて生きていこうと思ったからである。

光輝く草木や、青天に覆われた山々をスケッチする。ただ自然の移ろいが見えてくることだけで幸せを感じる、そんな単純な生活に帰りたいと願っている。

団塊格差

福田利夫
法学部法律学科卒
東京都目黒区在住

また桜の季節がやってきた。1973年3月旧校舎で行われた卒業証書の授与式は、あまりにもあっけなくてこれからどうやって時間をつぶそうかと考えたことを思い出す。あれから35年、時間だけは全ての人々に平等に過ぎ、私達の「団塊」はもうすぐ60歳を迎えることになる。

私のサラリーマン生活の大部分を占める外資系企業では、色々なことをやらせてもらったが、そのなかで記憶に残っているのが東京地検の名検事の方が、早めに退官して始められた、高齢者の人々の生き甲斐探しを手伝っているNPO（と呼んでよいと思うが）である。社会貢献の一環として、若干のお手伝いをさせてもらったのだが、その時の窓口となった、定年退職したボランティアの方との雑談のなかで、その方が「退職後の心得には重要な3原則があると思います」と発言して以下の3原則を教えてくれた。若干の個人的解釈を加えて述べると以下の通りである。

まず当たり前だが「健康を保つ」である。これがなくしては、残りの人生を有意義には暮らせない。厚生労働省の医療費削減の策謀とは思わずにメタボリックにならないように自己管理と努力を惜しんではならないだろう。人間ドック等の定点観測で、自分の体の強み読みを自覚し、「強みは伸ばし」「弱みは補完する」という、経営学上のSWOT分析の対策を準用することも必要であるかもしれない。

次に「少しの財産を準備する」である。

私の
ゴールデンポンド

細　谷　教　雄
理工学部卒
埼玉県志木市在住

中国の諺に「恒産なくして恒心なし」という言葉があるがマックスウエーバーの「プロテスタンティズムと資本主義の精神」には確か「下部構造は上部構造を既定する」という表現があった。自由な精神活動には、ある程度の経済的基盤が必要ということだろうか・・・・

最後に「知的好奇心を保つ」ということである。つい最近のある新聞の一面に、昨今の世界的な株価の暴落で投資信託の価格が、購入価格を割りそのリスクを知らなかった（知らせなかった?）高年齢層に問題だという記事があった。企業側のリスク開示責任は当たり前のことだが、自己責任で投資する以上はどんなリスクが発生しているのかという知的好奇心が必要だろう。サブプライムローンがどんな仕組みかもしらないで徒らに狼狽するようでは銀行の普通預金に預けておいた方があるべき選択肢なのかも知れない。

「言うは易し、されど行うは難し」だが団塊内部に発生していると言われる「団塊格差」はこんなところから生じているのかも知れない。

「ゴールデンポンド」とは、日本名「黄昏」というヘンリー・フォンダの遺作映画である。キャサリン・ヘップバーンと演じる老夫婦と娘（ジェーン・フォンダ）、孫が老夫婦の別荘で過ごすひと夏の物語だ。

五十歳を過ぎるといっぺんに階段を三段ぐらい落ちた気がするな。ついにゴールデンポンドになったと、このところ感じる。

数年前に同居していた母が突然亡くなり介護生活を計画していた私達夫婦は、これからどう生きていくかに迷いが生じた。

そこで二人とも好きなことをして、老後を過ごそうと決めた次第だ。ワイフは、苦節30年になる「建築設計作品」の取り纏めをするため、母校の大学院に入り学生生活を満悦している。

私は、趣味の「写真」、「旅行」、「車」、「音楽・オーディオ」などに特化することにした。二人で国内外を車で旅行して、町をぶらついて写真を撮影したり、美術館を覗いたり、B級グルメで美味しいものを食べたり飲んだりして楽しんでいる。

「音楽・オーディオ」では音楽を聴くだけでなく、アンプ・デッキなどを修理して音色の違いなどを楽しんでいる。最近は、友人知人にも話が伝わり、古いアンプやプレーヤー、スピーカーなどを引き取ってきてレストアするようになった。レストア内容を問い合わせてるうちに某オーディオ・メーカーのOBで、アンプ類の修理が趣味という友人が出来た。今まで難しい修理は出来なかったのだが、古いアンプなどで音が出ないとか故障しているオーディオ機器の修理が出来るようになった。何せ彼の自宅は、オーディオメーカーのサービス拠点なみの設備がある。仕事の合間なので時間は掛かるが、メーカーが修理をしてくれない古いオーディオ機器がレストアされる。

特に20年以上前のアンプは各種スイッチやトランスフォーマーなど高級な部材を用いており、トランジスタやレジスター、キャパシターなども代替部品があり多くの場合修理が出来る。

もし皆様やお知り合いで、古いアンプなどを捨てたいと言う方があればご紹介ください。近県であれば、引き取りに伺いますので宜しくお願いいたします。

公認会計士として

三　澤　壯　義
商学部経営学科卒
仙台市在住

中央大学を卒業して今春で35年になります。

入学の年は昭和44年、東大の安田講堂事件があった年で、大学紛争の真只中でした。入学式は9月までおあずけ。御茶ノ水にあった本館の内庭には、ヘルメットをかぶった学生の投石用の小石が小山になって置かれていました。

私は高校時代の先生から聞いた公認会計士になりたくて、当時一番合格者の多かった我中央大学に入りました。現在、先輩公認会計士の活躍は目ざましく人数も一番多く、日本で唯一公認会計士団体の世界組織のトップに2人も就任しています。故白鳥栄一氏「国際会計基準委員会(IASC)」議長、藤沼亜紀氏「世界会計士会議(IFAC)」会長です。

4年生の時、運よくヤマが当たって公認会計士試験に合格した訳ですが、翌年、就職した監査法人で自動車メーカーの工場に連れていかれ、厚さ15cmはある部品の購入日報リストを目の前に置かれて、何をどう見たら良いのかまったく面食らってしまいました。職業会計士の世界は甘くないと感じることしきり、監査の実務を勉強するため、監査の移動時間の電車内でも厚い監査の実務の専門書を出して勉強しました。

監査法人勤務中は、出張は全てグリーン車で美味しい食事はごちそうになるし、こんなにいい職場はないと思いながら7年間お世話になりました。公認会計士といっても監査の現場では、棚

筆者近影

卸立会とか現場視察があり、白衣を着て自動車メーカーの工場を1日中まわって歩いたり、有価証券の実査で今でいうメガバンクの地下の大金庫室に行ったり、先輩は炭鉱の坑道の中まで下りていったそうです。

監査法人を退社後、故郷の仙台で会計事務所を開業しました。農家の8人兄弟の末っ子ですから、商売や事業に関係した親戚は誰もおらず顧問先ゼロからのスタートです。第一号のお客は、姉の嫁ぎ先の酒屋さん3,500円/月の顧問料でした。

日本の企業は、約4,000社の上場企業を除く200万社は中堅・中小企業であり、中小企業が日本の勤労者のほとんどを雇用しているといっても過言ではありません。この中小企業を支えている経営者の会計・税務・経営の相談者となりアドバイスする仕事はなんと素晴らしいことかと思います。

現在の仕事に従事するきっかけをいただいた母校、中央大学に感謝し私たちに続く後輩に大きなエールを送りたいと思います。

学生時代の想い出

矢　島　　昇
文学部文学科卒
東京都昭島市在住

私が中央大学に入学したのは昭和四十四年のことでした。街角には由紀さおりの「夜明けのスキャット」が流れ、米国の宇宙船アポロ十一号が人類史上初めて他の天体に着陸し、世界がわいた年でした。学生運動などで教育界も大きく揺れた頃でした。

中央大学に合格したものの入学式の日取りもいっこうに決まらぬまま四月が過ぎました。そして昭和四十四年度入学式が三号館大講堂で挙行されたのは五月十八日のことでした。入学式は終わったものの正常な授業は行われず、自主講座のようなものが断続的に行われていました。その中の一つに磯田光一先生の講座がありました。三島由紀夫の文学について穏やかな口調ながら熱の入った講義が印象的でした。誰が翌年十一月二十五日の三島由紀夫割腹事件を予想できたでしょうか。

授業再開は八月中旬でしかも多摩校地のプレハブ校舎でした。当時、誰が名づけたのかこのような授業を「疎開授業」と呼んでいました。

月日も流れ大学が正常化するにつれて駿河台校舎での授業が始まりました。私は文学部文学科英米文学専攻第四組十四号、担任が百瀬泉先生、クラスの仲間たち六十九人がようやく揃うこととなりました。

当時の講義で印象に残っているものを振り返ってみたいと思います。早乙女忠先生の現代イギリス作家作品研究。文化人類学では明治大学の祖父江孝男先生。野崎孝先生の英文学史。

百瀬泉先生の英文学史ではシェイクスピアの作品、特に悲劇を中心に教えていただきました。井上謙治先生の現代アメリカ作家作品研究。さらに朱牟田夏雄先生の近代イギリス作家作品研究、ヴァーノン・ブラウン先生の表現研究、嶋田襄平先生のアジア地域史、近代アメリカ作家作品研究の相楽幸助先生にも大変お世話になりました。

講義の他に駿河台校舎近辺の思い出も語り尽くせません。学生会館の前から靖国通りにぶつかるまでの距離にして二、三百メートルの道路の左側には、豚カツ食堂の名門キッチン・タイガー、そしてその裏手には雀荘の三光、ここが私たちの待ち合わせ場所でした。当時の麻雀仲間たちとは今でもつき合っています。道路の右手には赤い暖簾のかかった亀戸餃子の店、いつも店内には紫煙たなびく喫茶店ハイライト、ここでは文四の仲間たちがあつまりわいわいガヤガヤと時を忘れて話し合ったものでした。靖国通り沿いにも古書店街をはじめ、すずらん通り、喫茶店ラドリオそしてパチンコの人生劇場などがあり随分お世話になりました。

（中央大学文学部創立五十周年記念『英米文学専攻五十年史』原稿抜粋）

大学事情——昨日・今日・明日

山田博文
商学部会計科卒
前橋市在住

われらの学生時代は、キャンパスの中庭が舞台になり、さまざまなアピールが社会に対して発せられた時代であった。たしかに騒々しかった。まともに講義すら行われなかったし、出席する学生も少なかった。

でも、大学で学ぶことをサボっていたわけではなかった。むしろ、社会や人生について、そして世界と平和について、一生懸命学んだ時代であった。大学生協や神田界隈の本屋では、難しい哲学や社会科学の本が売れていた。自主的に学んだ若者たちは、社会に対して自分の意思を伝えようとしていた。

あれから40年近くの月日が流れた。いま、わたしは、東京から100キロほど離れた地方の大学に勤め、そこで経済学を教えている。将来教師をめざす、どちらかといえば、真面目な学生たちに囲まれて、講義にゼミに、論文や教科書執筆に、日々、勤しんでいる。大学生協の理事長職も引き受けてしまった。

でも、どこかがちがう。静かである。キャンパスを歩いても、立て看板が見えない。学生たちが集まって集会を開いたりしている姿など、どこにも見あたらない。出席を取らなくとも、学生たちは、自主的に講義に出る。といって、生協や近隣の本屋で、教科書や参考文献がよく売れているわけではない。そもそも書籍全般があまり売れない。バイト代は、ケイタイや旅行に遣う。

今の学生たちに抜けているのは、社会に目を向けること、社会科学を学ぼうとすること、自分の意見を持って、社会に働きかけ、なにかを実践することである。もっとも、これは、学生たちだけではない。ヨーロッパでは、老いも若きも自分の主張を掲げて街頭に出ているが、日本社会は黙っている。

そうなれば、成長重視の企業社会日本だから、金銭や権力を持つサイドは大手を振って自分の主張を押し出してくる。大学は企業の研究機関になり新製品の開発に取り組みなさい。社会科学よりも、理科教育と科学技術に力を入れなさい---仮に、そうやって高度成長を達成しても、社会は良くならない。成長の成果は、よりよき社会を実現するよりも、さらなる成長のために配分される。時代閉塞社会日本。

大学も、社会も、みな元気になるためには、自分たちで自分たちの未来を決めるということを、もっと強く主張し、実践することが必要な時代にいる。「自由」を手に入れたわれらが「団塊世代」よ、昔に戻って、もっと騒げ!未来はわれらのものだ!

白門48会創立の頃
――この10年を振り返る

白門48会幹事長
横　田　利　久

同期会結成準備委員（一部）

1998年6月24日夜、中央大学駿河台記念館7階の学員会役員会議室に、学員会事務局長の呼びかけで、18人のお互いに見知らぬ人々が集まった。秋のホームカミングデーで我々昭和48年卒業生がメインゲストとして招待されることから、それを契機に年次別の支部を立ち上げないか、という呼びかけである。

ホームカミングデーにメインゲストの卒業年次が招待され、そこに集まった卒業生が呼びかけあって同期同窓会が結成され、それが学員会の年次支部に公認されるというパターンは、その数年前から恒例となっていた。ただ、今回少し異なるのは、それをホームカミングデー開催の4ヶ月前から結成準備委員を募りはじめ、組織的に準備会活動を開始したことだ。

当日参加者全員の賛同を得て、同期会結成準備委員会を組織し、発起人代表には、ひとまず私がなった。準備委員の目論見としては、ホームカミングデー開催当日に大々的にPRして、一挙に大量の入会申込みを得て事実上発足してしまおうということだった。

以来、毎月会合を重ね、準備委員のネットワークで委員を増やし、ホームカミングデーに向けて、のぼり旗などを準備した。

10月4日の開催当日には、白門48会の「出店」を出し、懇親会会場でのぼり旗を振るなどしてPRし、約130人の白門48会参加申込者を集めることができた。

引き続き、翌年の結成総会開催に向けて、年末には住所判明昭和48年卒業生全員に手紙で入会呼びかけを行い、1999年4月2日～3日には16人が中央大学の葉山寮で合宿するなどして準備に取り組んだ。結局1年間で計13回の準備会を開催し、準備委員は最終的には50人となった。

1999年6月5日の結成総会（第一回総会）には95人が参加、327人の会員で白門48会は正式スタートした。初代会長は安藤正敏氏（法学部）にお願いし、私が事務局として幹事長を務めることとなった。9月16日付けで学員会本部から正式に支部としての承認を得、支部旗をいただいた。あれから、10年が経過した。

学員会の年次支部は、昭和20年代から、ごく一部を除いて毎年次結成されているが、白門48会は、たいへん活溌な活動を行っていることで名高い。毎年学員会本部から発行されている各支部の活動報告書をみると、まだ現役職業人が圧倒的に多いにもかかわらず年間行事数はトップ10に入る。毎年の箱根駅伝応援、伊勢駅伝応援における応援風景は必ずテレビで放映され、出雲駅伝応援とあわせて、白門48会といえば駅伝応援と、学内にとどまらず知られている。毎年のホームカミングデーにも必ず組織として旗を掲げ25人程度が参加している。

会員数は年次支部約30支部の中では中規模であるが、中央大学創立125周年募金はトップ5に入っている。2006年の関西支部設置に引き続き、2007年には東北支部も設置、10周年の本年には九州支部も設置予定であり、いわば全国に拠点を持っている。この要因は、幹事などの役員を中心に、人柄と面倒見がよく、積極的に行事を企画する人が多いこと。そして、こうした方々に担われて、同好会活動が他支部に比較してたいへん盛んなことにある。隔月開催の定例幹事会の活動だけではこうはいかない。

さて、あらためて白門48会の存在意義は何であろう。結成文によれば、「中央大学で同時代に青春を共にした者同士が再会し、当時の学部・クラス・サークル・友人関係の枠を超えて、往時を懐かしみ、仕事・家庭・地域・社会・趣味などを自由に語り合える場を持ちたい。それによって、お互いを励まし、明日への鋭気を養い、相互・自己啓発につなげていきたい」ということであり、そうした交流や活動の中から、母校の興隆にも寄与できることがあれば、ということである。それは今も輝きを失ってはいない。

結成準備会活動時から、準備委員の皆で語っていたことがある。それは、今は仕事や家庭がたいへんで白門48会の存在に関心がない人も、10年15年経てば、その環境は大きく変わってくる。そのときまで、可能な人で支えあって白門48会を継続していこう。きっとそのときには、そうした方々も、白門48会があってよかったと思ってくれるに違いない、と。

あれから10年経過して、数年のうちには、会員の多くが「あらたな人生」を歩みだすときがやってきた。それは、あらたな会員の方々をお迎えし、白門48会がリフレッシュするチャンスでもある。もう少しだ。そのときまで、可能な人たちでお互いにいたわりながら、無理なく楽しんで白門48会の活動を続けていきたいと願っている。

（商学部卒　東京都国立市在住）

中央大学葉山寮での合宿準備会で
気勢を上げる委員たち（1999年4月）

設立準備会懇親会

——編集後記にかえて

10周年記念誌編集委員
榎　本　真　一

ある日、クラスのマドンナ的存在だった藤野美知子さんから電話がかかってきた。

同期会を立ち上げるので準備委員になってくれ、という依頼だった。

同期会というからには、他学部の卒業生もメンバーになるのだろう。そういうなかでやっていくのは気が重い。なんとか断る口実はないものかと電話口で頭を巡らし、自分は1年休学したため卒業は49年になることを告げた。

それで難を逃れたと思っていたら、再び電話があり、44年の入学なら会員の資格があるという。しかたなく「白門48会結成準備会」なるものに出席した。委員は10人あまり、横田さんが議長役で、各学部からの代表がそろっていた。議題は規約やら会員をどうやって集めるかといったことで、あまり楽しいものではなかった。私はほとんど発言の機会もなく、座は懇親の飲み会に移った。

その席で、私が出版・印刷に関連した仕事をしていると知ったメンバーから、会報制作の担当者に祭り上げられた。酒が言わせた言葉だと聞き流せばよかったのだが、初回の顔合わせだったせいで真に受けてしまった。

居酒屋では、最初考えていた学部の違いによるセクト意識などはまったくなく、皆平等でフランクだった。経歴や職業は異なっているが、“あの頃”のことを語ればすぐに打ち解けることができる。人生観や世界観が近く、談論風発、会話が弾む。多感な青春の一時期を同じ学校で過ごしたせいか、人間性の根幹に共通するものがあるのかもしれない。

ホームカミングデーでの会員募集
左から佐藤愛子さん、筆者、藤野美知子さん

それからは、準備会の会合にはほぼ毎回出席するようになり、ホームカミングデーで会員を集めようと多摩校舎まで出向くはめになった。

多摩校舎での勧誘は効果的だったとみえて、多くの会員が入会した。そのなかには準備委員を引き受けてくれる人もいて、準備会は一気に活気づいた。

そんな準備会の時期がほぼ1年、会報も0号（準備号）を出し、設立総会を迎えることとなった。設立総会はなかなかの盛況で、私のクラスからも数多くの出席者を得た。

私は広報担当の副幹事長に抜擢されて、以後年2回の会報発行を通じて48会の楽しさを伝えるべく、努めることになる。

（文学部卒　横浜市在住）

48会創立 祝 10周年

協賛個人広告

中小企業診断士
福田利夫
（法学部法律学科卒）

〒153−0043
東京都目黒区東山1−19−23
TEL 03-3710-7704 FAX 03-3710-7704
E-mail：fukudat@b03.itscom.net

昭和第一高等学校　校長
矢島　昇
（文学部文学科英米文学専攻卒）

〒113−0033
東京都文京区本郷1−2−15
TEL 03−3811−0636(代表)
E-mail:nyajima@sdh.bunkyo.tokyo.jp

なみきみち社　代表
榎本真一
（文学部哲学科社会学専攻卒）

〒236−0005
横浜市金沢区並木1−17−12−1305
TEL 045−772−0760
E-mail:kinatu.s@titan.ocn.ne.jp

平成20年6月　日発行
発行者　中央大学白門48会支部

制作・印刷